研究論文

複合前置詞句 Contrary to NP の副詞用法と叙述用法におけるNPの比較

大橋　哲

1　研究の背景

筆者は、論理的に対立する命題（p と not p と示す）が文章構成にいかなる役割を果たすかについての興味から、複合前置詞句 contrary to NP (Noun Phrase) という表現に注目して、この表現の NP の主要部名詞となりうる単語の特定と意味的分類を試みたことがある（拙論1998、1999、2002)。それは、この句を含む以下のような文から、論理的に反対の命題と、それぞれの命題を特徴づける要素を取り出すことができると考えたからである。

Contrary to popular belief a thatcher's work doesn't only occupy the summer month.

この文から a-thatcher's-work-only-occupy-the-summer-month[1] という意味内容を取り出して命題 p とする。すると、この文は、命題 p が多くの人の信じるところ（*popular belief*）では真であるのに対して、発話者の知識においては偽である（命題 not p が真である）という解釈が成り立つ。「発話者の知識において」と述べる理由は、"a thatcher's work doesn't only occupy the summer" という情報が発話者以外の誰かを情報源とするということが示されてはいないことと[2]、普遍的な知識を述べるために *doesn't occupy* という現在時制が用いられているからである。この文では、大衆に帰せられた心理世界（*popular belief*）と発話者の知識とが、命題 p の真理値について対比されているとも言える。前者においては、命題 p が真であるのに対して、後者においては同一命題が偽である。前掲の拙論では、*popular belief* という語句や文の時制などの言語表現

を、命題 p の照合される世界を特定する要素と見做し、「世界特定要素」と呼んだ。それは、命題 p の真理値を決定するコンテクストと考えてもよい。筆者は、命題 p の真理値を異にする世界が文章内で比較され、様々な意味が生まれることを「命題相対化」と呼び、その記述を試みてきた。

前述のように、複合前置詞句 contrary to NP を含む文からは論理的に対立する命題を推論することができ、更にその中に含まれる *popular belief* などの NP が、対比される一方の世界特定要素を明示しているのである。その NP の意味的特徴を探れば、文章中で対立命題が果たす役割の一面が理解できるのではないかと考えている。

複合前置詞句 contrary to NP の NP は、belief, report, law, appearance, analysis, advice などのある一定の意味を表す語をその主要部名詞としてもつ世界特定要素である。筆者は、この複合前置詞句を、対立命題が文章内で何らかの役割を果たしていることを示す一つの言語シグナルと見做し、NPを収集し、その主要部名詞の意味的な分類を行った（拙論2002）。以下に、その分類と基準を示す。（各グループに属する主要部名詞のリストについては、本稿末の付録を参照されたい。）

1）命題 p が、外界（現実世界）における事実や出来事と対応する場合、その世界特定要素の主要部名詞を「経験世界」の特定要素とする。例：experience, evidence

2）命題 p が、外界に存在する言語情報（音声・文字情報）と対応する場合、その世界特定要素の主要部名詞を「言語情報世界」の特定要素とする。例：report, commentary

3）命題 p が、外界に存在する社会的な行動基準（法律など）と対応する場合、その世界特定要素の主要部名詞を「基準世界」の特定要素とする。例：law, practice

4）命題 p が、発話者の感覚器官を通じて知覚した外界の出来事と対応する場合、その世界特定要素の主要部名詞を「知覚世界」の特定要素とする。外界の事実や出来事の認識に視覚や聴覚が関与したことをあえて示すもの。例：appearances

5）命題 p が、発話者の行う演繹的・帰納的な思考や、蓄積された一般的知

識の論理的操作の結果と対応する場合、その世界特定要素の主要部名詞を「知識・思考世界」の特定要素とする。例：speculation, criticism

6）命題 p が、発話者が外界に対してもつ信念や欲望などの心理と対応する場合、その世界特定要素の主要部名詞を「心理世界」の特定要素とする。例：belief, wish, hope

7）命題 p が、発話者の行う発話行為の命題要素と対応する場合、その世界特定要素の主要部名詞を「発話行為」の特定要素とする。例：warning, caution

1)～3）には、発話者の認識の対象となる「外的世界」を示す名詞、4）～6）は、発話者の感覚器官や主観的判断に基づく「内的世界」を示す名詞が含まれる。7）の発話行為については、発話行為が遂行されれば外界に言語情報が音声あるいは文字として存在することになるので、その点では言語情報世界と同様である。しかし、発話行為は、発話に至る過程における発話者の心理世界での命題の照合が前提とされており、内的世界の特徴をもそなえている。発話行為を示す名詞は、内的世界と外的世界の両方を示しているとも言える。

この世界特定要素の分類は contrary to NP というたった一つの言語シグナルを頼りに収集された極めて限られたデータに基づいたものであり、到底試案の域を出るものではないが、仮に想定したこれら7つの世界がどのような目的で文章内において対比されるのかを調べることは、興味深いことである。

上記の世界特定要素の分類をする際に参考にした先行研究がある。それは、同格の that 節を取りうる名詞の意味分類である。例えば Francis (1993) は、その様な名詞を、「発話行為の種類、ある種の言語的行為、心理状態、思考プロセスやその結果、感情と態度、その他の一般抽象名詞」というグループに分類している。また、Schmid (2000) は、同様の文法的特徴を持つ名詞をシェルナウン（shell nouns）と呼び、コーパスに基づく体系的な分析を行っている。一般的に、複合前置詞句 contrary to NP の主要部名詞も、belief that といったようにN + that という形で同格のthat節を取りうるという特徴を持っている。ただし、同格の that を普通は取らない名詞の場合もあり、完全に同格の that 節を取り得る名詞の下位範疇とは言えない。

2　本稿の目的

拙論（2002）では、前節で述べたように、複合前置詞句 contrary to NP を含む文を収集し、NPの主要部名詞を１）～７）の基準によって７つのグループに分類した。しかしその際には、contrary to NP の文中における統語的な特徴が、ＮＰ の種類にどう影響するかという点については考察していなかった。本稿では、コーパスから抽出したデータを基に、その点を明らかにしたい。コーパスを用いた言語研究の大きな利点の一つは、語句同士の通常は意識されていない繋がりや、直感的には説明できない統語と意味の関係を、膨大な言語データを基にして解明することが可能な点である。本稿では、contrary to NP が文中に現れる多様な統語環境のうち特に頻繁に見受けられる二つに注目し、それぞれの環境の中で用いられる NP の性質にどのような違いがあるかを考察する。その統語的環境の一つは、contrary to NP が文頭に現われる副詞的用法であり、もう一つは be-動詞の後に位置する叙述用法である。コーパスのデータは、これらの統語的環境の違いが、複合前置詞句の NP となり得る世界特定要素の種類に影響することを示している。

分析の手順としては、まずコーパスから Word Smith のコンコーダンスプログラムを用いて contrary to NP を含む文を収集する。その中からそれぞれの形式を持つ文を抜き出して、NP にどのような意味的な特徴が見られるかを探る。分析には、前述の拙論（大橋2002）において世界特定要素の分類を行う際に用いたコーパスを再度用いる。それは、英国の日刊紙 The Independent の15ヶ月分の新聞記事を収録した The Independent on CD-ROM（1 October 1990-31 December 1991）である。本稿で用いる例文は、全てこのコーパスからの引用である。

3　Contrary to NP の副詞用法と叙述用法の例

複合前置詞句 contrary to NP という表現は、文の中で多様な統語的役割を果たしている。以下に、コーパスに見られる主な例を揚げる。便宜的に、対比

される二つの世界のうち、contrary to NP の NP で特定される世界をＷ１、それと対比される世界をＷ２とする。

1）Contrary to appearances, the European Community does have clout.
文頭の副詞的用法

2）Mr Blair argued that contrary to Mr Howard's claims, the figures probably meant a cut in training expenditure in real terms and possibly cash terms in certain programmes.
従属節の始めにおける副詞的用法

3）Thatcher, contrary to left-wing mythology, has always been cool, sometimes frosty.
主語として機能する固有名詞の後の挿入句として副詞的用法

4）She remained so emotionally attached to her father - who, contrary to psychoanalytic precept, was himself her analyst - that she never married.
主格関係代名詞の後の挿入句として副詞的用法

5）Censorship is still alive and well in Cuba, it seems, contrary to Government claims.
文末の副詞的用法

6）I'm also quite a lazy person - contrary to what you might think - and if something isn't perfect, isn't first rate, I'd let it pass. But Gilles wouldn't.
文末の副詞的用法と見なせるが、等位接続詞で始まる後続の文との間に挿入された副詞的用法。（contrary to に名詞ではなく wh-clause が続く例）

7）Accordingly an adjudication officer's refusal to continue to grant mobility allowance to a United Kingdom national on the ground that he had transferred his place of residence from UK to France is contrary to EC law.
be 動詞の補語としての用法

8）Ninety-nine per cent of what we discuss in academic life is contrary to what people actually read.
be 動詞の補語としての用法（contrary to に名詞ではなく wh-clause が続く例）

9) Unfortunately, you attribute to me a view which is quite contrary to my actual position.
主格の関係代名詞に続くbe動詞の補語としての用法

10) It claims that the Net Book Agreement governing prices is contrary to European Community law.
従属節中の be 動詞の補語としての用法

11) Amnesty International this week condemned the failure of the Government to say what hard evidence it had against the detainees as being 'contrary to international standards'.
S + V + W2 + as + being contrary to W1　　V = condemned

12) Accordingly, they (the offences) should now be charged as being 'contrary to section 39 of the Criminal Justice Act 1988'.　W2 +be+Vpp +as being contrary to W1　前例12の形式の受動態　Vpp = charged

13) It points the finger at a belief and claims it to be contrary to the orthodox doctrine of the Church.
S + V + W2 + to be contrary to W1　　V = claims　W2 = belief

14) But this could be seen to be contrary to the arms control agreement that led to the removal of cruise missiles from Britain. W2 + be + Vpp + to be contrary to W1　前例の受動態　Vpp = seen

15) Childcare experts yesterday condemned the practice as contrary to the Child Act, introduced in October.　as の後に being の無い、前例12の変化形

16) His theories run contrary to accepted wisdom.
run contrary to（be 動詞以外の動詞に続くもの）

17) The tribunal found that forcing Mr Halliday to transfer was an unlawful act of victimisation contrary to the 1976 Race Relations Act.
名詞句の後続修飾語句（Postmodifier）としての用法

このように、contrary to NP が文内で担う統語的役割は多様であるが、その中で文頭に現れる用法（以後、文頭用法）と、動詞（主に be 動詞）の補語と

して現れる用法（以後、叙述用法）は、最も出現頻度の高い用法である。上記の例文でいうと、1)～2）の形式の文を文頭用法の例と見なし、7)～16）の形式の文は叙述用法と見なす。また、7）が典型的な叙述用法の例である。この2用法の文は、コーパスから抜き出すことが比較的容易であり、以下では、その2用法と世界特定要素の関係を論ずる。

4　コーパスに見られる両用法と世界特定要素の関係

文頭用法、叙述用法それぞれの文をもれなくコーパスから抜き出すことは、統計的にその頻度を調べる場合などには必要であろうが、本稿の趣旨から言えば、それぞれの十分な用例が入手できれば事足りる。まず、The Independent on CD-ROM を検索ソフトの WordSmith (ver.3.0) を用いて検索し、contrary to のコンコーダンスを出力した。前記 CD-ROM には、英国 The Independent 紙の1990年10月1日から1991年12月31日の15ヶ月分の新聞記事が収められているが、そこに含まれた contrary to の使用例は、全部で634件であった。コンコーダンスと共に得られるデータとして、頻出する単語の連鎖を示すクラスタ (cluster) があるが、それは and contrary to や totally contrary to などのような、コンコーダンスラインに含まれている語句 (contrary to) が頻繁に共起する単語の連鎖を示してくれる。これを参考にして、文頭用法と叙述用法の例を集めることにした。

文頭用法の方は、文頭の文字が大文字であることから、まず、大文字と小文字の区別をする (Case-sensitive) 指定をして、再度 contrary to のコンコーダンスを検索した。その結果、文頭用法の例は161件見つかった。しかし、文頭用法と見なせるような場合でも、contrary to の前に単語があると (Alas, contrary to ...など)、句が大文字で始まらないので、この中には含まれていない。161件の他、クラスタを示すリストにある and contrary to, that contrary to, quite contrary to, but contrary to という連鎖は文頭用法である可能性があるので、それぞれの場合を検索し、文頭用法と判明したものは用例として加えた。その結果、文頭用法の例は186件となった。

叙述用法は、主にbe動詞の後に contrary to が来る用法であるので、クラス

タに含まれている as/is/be/were/are/being/ contrary to という表現のコンコーダンスを検索したところ、90件あった。be 動詞と contrary to の間に単語が入っているものがかなりの数抜け落ちていると思われるが、このような機械的操作でそれらを抜き出すのは容易でない。contrary to の左側25単語以内までならbe 動詞の含まれる用例を検索することは機械的に行えるが、それが叙述用法であるか否かは、一件ごとに精査しなければ判断できない。そこで、今回のデータには、クラスタに含まれる and contrary to, not contrary to, totally contrary to, quite contrary to, but contrary to という連鎖についてのみコンコーダンスを検索し、その中で叙述用法と判断しうるものを用例に加えることにした。また、as contrary to, run/runs/ran contrary to を含む文も叙述用法と判定したものを用例に加えた。その結果、叙述用法の例は、143件となった。

このようにして収集した文頭用法と叙述用法の用例に含まれる contrary to NP の NP を比較してみると、それぞれの用法に用いられる NP の主要部名詞には意味的な違いが認められた。WordSmith のコンコーダンス検索機能には、検索した語と共起する単語（Collocation）を示す機能がついている。この Collocation 機能を用いて、contrary to という語句の右側５語以内に頻繁に現れる語句を、文頭用法のデータと叙述用法のデータについて比較してみた。その中には、以下に示す世界特定要素と、それを修飾する語が含まれていた。（ ）内の数字は、データの中で用いられた回数を示しており、ここには３件以上例が見つかったものだけを挙げる。

文頭用法	叙述用法
popular (42)	law (15)
belief (30)	article(s) (11)
report(s) (22)	spirit (7)
expectations (11)	interest(s) (10)
many (11)	policy (6)
impression(s) (12)	convention (5)
opinion (8)	public (5)
image (5)	common (4)

report (5)
claims (4)
myth (4)
practice (4)
assertion(s) (4)
perception(s)(4)
view(s) (4)
public (4)
recent (4)
earlier (3)
mythology (3)
reported (3)
statement (3)
usual (3)
widespread (3)
act (3)
good (3)
justice (3)
natural (3)

両用法の世界特定要素を比較してみると、叙述用法は law によって代表される基準世界を特定するものである一方、文頭用法は、belief/expectations/（心理世界)、reports/claims/assertion(s)（発話行為）、myth/mythology/statement (言語・情報世界)、opinion/view(s)（知識・思考世界)、impressions/perception(s) (知覚世界）など、基準世界以外の世界を特定するものが一般的であることが分る。ただし、practice のように基準世界を特定すると考えられるものでも、表に示すように文頭用法で頻繁に用いられるものもある。今回のデータの範囲では、叙述用法として用いられた practice は、２件のみであった。文頭用法の代表である belief については、contrary to の右側５語以内に現れる例を全コーパスで検索すると49件あったが、その全てが文頭用法と見なしうるものであり、叙述用法は一例も無かった。ただし、複数形beliefsを叙述用法に用いた例が一件だけあった。

His arrogance shocked many Americans, and his unwillingness to recognise

important constitutional protections of individual privacy and his commitment to majoritarian domination over the individual were both contrary to deeply held American beliefs.

また、以下に示すように、意味的には belief と関連する、what they believed before という叙述用法として用いられた表現が、１件見つかった。

The former Cabinet minister Michael Jopling said: 'I find it astonishing how people can provide back seat driving advice which is totally contrary to what they believed before.'

形容詞の popular は、 belief と共に popular belief という表現でよく用いられるが、それが叙述用法として用いられている belief を修飾する例は、全コーパスの中で１例も見つからなかった。

一方、叙述用法の代表といえる law は、コーパス全体の中では contrary to の右側５語以内に現れる例が29例見つかったが、１例を除いて全てが叙述用法と見なしうるものであった。その１例の文頭用法の例は以下に示すものである。

Contrary to Kenyan law, Gitobu Imanyara was held incommunicado for four days before being charged.

以上のことから、叙述用法はlawに代表される基準世界の特定要素を W1 に取り、文頭用法はそれ以外の世界（知覚世界、心理世界、知識・思考世界、言語情報世界、発話行為）の特定要素を取る傾向があると言える。ただし、この統語的な特徴と世界特定要素の関係は、あくまで一般的な傾向であり、上述の文頭に用いられた contrary to Kenyan law のような例外や practice のような両用法に共通に用いられる特定要素もある。

5　Contrary to NPの意味機能：「基準 － 違反」と「誤り － 訂正」

複合前置詞句 contrary to NP を含む文において、NP の世界特定要素によって特定される世界を W1 とし、それと対比される世界を W2 とする時、叙述用法と文頭用法には、それぞれ以下に示すような典型的な特徴がある。

どちらの用法においても、W1 は W2 を解釈・評価するための比較の基準となる世界であり、主に経験世界以外の世界である。それに対して、典型的 W2 は経験世界である。叙述用法における W1 の典型は law などを主要部名詞にもつ基準世界である。W2 の経験世界は、主に文脈からの推論によって判断される。文頭用法における典型的な W1 は、叙述用法の W1 である基準世界以外の、知覚世界や心理世界などである。典型的 W2 である経験世界は、主に述語動詞の時制によって特定される。つまり、どちらの用法においても、経験世界の出来事・現実を表す命題が、基準世界やその他の世界において反対の真理値を与えられることによって、二つの世界が対比されるのだと言える。この節では、経験世界がその他の世界と対比されることで生まれる意味について論ずる。

命題相対化の意味機能は多岐にわたると思われるが、contrary to NP を含む文に関与するものに限って、２つの最も頻度の高い表現形式である叙述用法と文頭用法の文がもつ典型的な意味機能をまず考えてみよう。これら２用法における世界の対比が生み出す意味はかなり異なっている。その違いは、主に両用法における W1 の性質の違いによるものである。２用法を比較する意味で便宜的に叙述用法を、p is contrary to W1、文頭用法を Contrary to W1 p と表してみる。叙述用法の典型的な機能は、p の表す行為が W1 の基準に違反していることを述べることである。W1 では p が偽であることが contrary の意味から論理的に導き出される。多くの場合そうであるように、p を真とする W2 が文脈から経験世界であると判断される場合には、現実の行為 p が法律などの規則に違反していることを述べる。一方、文頭用法の一般的な機能は、W1 の誤りを W2 で訂正することである。W1 では p が偽であることが論理的に導き出されるが、それは誤りであり、W2 では p が真であることを述べる。この２用法の異なる機能をそれぞれ、「基準 (W1) －違反 (W2)」、「誤り (W1) －訂正 (W2)」というように表記し、命題相対化における２世界の対比が生み出

す２種類の意味を示すことにする。

Contrary to NP を含む文において、命題相対化が「基準 - 違反」や「誤り-訂正」の意味を成立させていると見なしうる例を探すのは容易である。以下に示す例においては、contrary to NP がこれらの意味機能を強調したり前提とするような表現と共に用いられている。まず、命題相対化の「基準－違反」の意味が明示されていると考えられる例を以下に示す。全ての例が、叙述用法と見なしうるものである。

What appears to be unlawful, or contrary to the contract that was signed between BSB and the IBA, is the fact that no forewarning was given to the IBA and it would seem there might be a controlling interest by a non-EC body in the new outfit.

(unlawful が contrary の違法性の意味を強調)

Mr Le Roux, a former South African student activist, said he thought it unfair and contrary to natural justice that DTI inspectors should be allowed to collect evidence using compulsive powers only to pass over such evidence to prosecuting authorities in the same way as they had done in the Guinness and Blue Arrow cases.

(unfair が contrary の不当性の意味を強調)

Earlier, The Lords Leader, Lord Waddington, opening debate, condemned the use of captured airmen as human shields as 'inhuman, illegal and contrary to the Geneva Convention'.

(inhuman, illegal が such action: to use captured airmen as human shields の違法性を強調。また、condemn［非難する］という行為は命題相対化の「基準－違反」という意味機能を前提としている。)

After a four-hour meeting, and under strong pressure from staff and other immigrant welfare organisations, the UKIAS executive unanimously rejected the

plans as 'contrary to natural justice'.
(reject［拒否する］という行為は、その行為の主体の奉ずる基準に事物が見合わないから行うものであり、命題相対化の「基準－違反」という意味機能を前提としている。この例の場合、基準は natural justice、違反は plans であり、未来の行為の違法性が前提とされている。)

In a report to Leicester City Council last month, the City Planning Officer warned that Vaz's floodlit name-plate was 'inappropriate and contrary to the North East Leicester Local Plan'.
(inappropriate が contrary の不適切性の意味を強調している。)

The inquiry will criticise the practice of moving disruptive inmates from jail to jail as contrary to natural justice.
(criticise［批判する］という行為は命題相対化の「基準－違反」という意味機能を前提としている。)

Provisions in the Merchant Shipping Act 1988 which require nationality, residence and domicile conditions to be satisfied before a fishing vessel can be registered as British are discriminatory and contrary to article 52 of the EEC Treaty, and are therefore ineffective in relation to other EC states.
(discriminatory［差別的］という語に含まれる違法性の意味が contrary の意味を強調している。また、ineffective という否定的な表現が「基準－違反」という意味機能を前提としている。)

These would not only be unenforceable, but the court would almost certainly throw out the whole agreement as being contrary to public policy.
(throw out the whole agreement という行為は、命題相対化の「基準－違反」という意味機能を前提としている。)

Accordingly, they should now be charged as being 'contrary to section 39 of the

Criminal Justice Act 1988'.
(charge という行為は、命題相対化の「基準－違反」という意味機能を前提としている。命題 p は they の行った行為)

GRAHAM TAYLOR accused the Football League yesterday of acting contrary to the best interests of the game by 'hastily and rashly' deciding to extend the First Division on the back of England's encouraging World Cup performance in Italy.
(accuse という行為は、命題相対化の「基準－違反」という意味機能を前提としている。命題 p は TAYLOR の行った行為)

また、例文中の natural justice, best interests などに見られる natural や best といった肯定的な意味の修飾語は、その修飾する世界特定要素の基準性をより高めるための表現と考えられる。このような肯定的意味の修飾語は、叙述用法の W1 (NP) には頻繁に見受けられる。データに含まれている例を挙げると、civilised behaviour, established City practice, principal objectives, historical principle, the basic tenets of Thatcherism, the democratic principle, the known laws of physics, the traditional convention of the Olympics, などがある。

以上は、命題相対化がもつ「基準－違反」の意味を強調していると考えられる表現が含まれる例である。以下に、命題相対化が「誤り－訂正」の意味をもつことを強調していると考えられる表現を含む例を挙げる。全ての例が、文頭用法と見なしうるものである。

CORRECTION We would like to point out that contrary to the impression given by the headline which accompanied James Hunt's motor racing column in The Independent on Thursday, James Hunt does not blame Nigel.
(この文は、CORRECTION が示すように、新聞の訂正記事欄に現れたものである。命題相対化の「誤り－訂正」という意味は、訂正記事に contrary を含む文が多用されることを推測させる。今回 contrary to の文頭用法の例として検索したコンコーダンスの文中にも、contrary to が訂正記事を示す

CORRECTION という語と共に用いられたものが、この他に３例あった。)

Sir: Contrary to the highly misleading impression given in your article on 28 October ('Anti- Hooligan Drive Incited Soccer Violence'), the Sir Norman Chester Centre for Football Research is still some considerable way from concluding its study of the 1990 World Cup. Thus the 'report' to which the article alludes does not yet exist.
(文頭のSirが示すようにこれは読者から編集者への通信欄の記事であり、その目的は新聞記事の報道を訂正することである。highly misleading という表現で、W1: your article on 28 October の「誤り」を強調している。)

'No complaint has been made formally or informally and contrary to some erroneous reports, no inquiry was sought either by the Labour party or by Mr Kinnock's office.
(erroneous という単語が、W1: reports の「誤り」を強調している。)

Contrary to the stereotype image, the Scots prefer to dress up and be made a fuss of when they go out for dinner, while the English tend to be more casual.
(stereotype という単語が、W1:image の「誤り」を強調している。)

Contrary to uninformed belief, the lute has never been a folk instrument.
(uninformed という単語が、W1:belief の「誤り」を強調している。)

In a message to France, Zaire and Belgium yesterday the rebels said: 'Contrary to your disinformation propaganda, our movement, and this conflict, is based on a nationalistic and not tribal foundation.
(disinformation という単語が、W1:propaganda の「誤り」を強調している。この場合、W1 自体に「誤り」の意味が内在している。propaganda の他、rumour, prejudice などの単語も同様の世界特定要素として用いられている例がコーパスに見られた。)

また、命題相対化が「誤り－訂正」という意味をもつことを示す１つのシグナルとして、述部に否定語が含まれる場合が多いことが挙げられる。これは、文頭の W1 で真となる命題が既に想起されており、それを W2 で否定するという認知的プロセスが表現として顕現するものと考えられる。

このように、「基準－違反」又は「誤り－訂正」を意味していると判断し得る例は多いが、contrary to NP を含む文に関与する命題相対化が果たす意味機能は実に多様であり、必ずしもどちらかのラベルで表すことが適切とは限らない。

CONVENTIONAL wisdom was turned on its head in the financial markets as the oil price plunged by more than 9 dollars a barrel, its largest ever one-day fall. The dollar and gold also fell sharply but stock markets soared. The reaction was the reverse of what had been anticipated, and caught many traders by surprise. 'Everything has gone contrary to expectations,' Lawrence Eagles, an analyst with London-based commodity brokers GNI, said. 'The markets have surprised everyone.

A surprise came from the extreme-right Republicans who, contrary to expectations that they were a spent force, looked last night set to get just over 5 per cent and enter the state parliament in Munich for the first time.

Graf, somewhat to her surprise and contrary to previous experience, has avoided the bug, just as she has avoided losing a set.

「誤り－訂正」の例に見られるような否定的な意味の形容詞を伴った世界特定要素 (misleading impression, erroneous report, stereotype image, uninformed belief, disinformation propaganda 等) に比べると、これらの文において W1 として機能している expectations や experience という世界特定要素は、単純に「誤り」という意味機能を果たしているとは考えにくい。特に、experience は実際に起

きた過去の事実（テニス選手 Graf の試合で起こったこと）を意味しているので、「誤り」という意味機能とは相容れない。これらの例文に含まれている surprise という語は、これらの文における命題相対化の第一の意図が、誤りを訂正することではなく、予想と現実、或いは以前の経験と現実を対比し、そのずれの大きさを強調することにあるとも考えられる。この例も示すように、命題相対化の意味機能は多様であり、「基準－違反」や「誤り－訂正」といったような表記法でそれを一般化することには限界がある。

6　信憑性のスケール：Deontic/Epistemic Gradience

「基準－違反」・「誤り－訂正」、又はそのどちらにもうまく当てはまらない場合など、命題相対化の意味は多様であるが、その意味の判定は結局 W1 を規定するそれぞれの世界特定要素の信憑性の高低にかかっていると思われる。ここでいう信憑性とは、世界特定要素の示す世界が命題の真理値において現実世界と一致する可能性の高さ（epistemicity）又は現実世界と一致すべき義務性の高さ（deonticity）を意味する。ここでは、これまでに述べてきた以下の点に基づき、世界特定要素から成る信憑性のスケールを提案する。

１）個々の例において、命題相対化の意味機能を「基準－違反」や「誤り－訂正」と判定することが不自然である場合もあるが、それは expectations や previous experiences のように「誤り」とも「基準」とも判定しかねるといった、中間的な性質の世界特定要素が W1 としての働きをもつ場合である。

２）叙述用法において「基準－違反」の意味を成立させることが典型的である law という語や、文頭用法において「誤り－訂正」の意味を成立させることが典型的である popular belief のように、意味と統語的特徴の関係がほぼ決まっている世界特定要素がある一方で、practice という語のように、叙述用法にも文頭用法にも共に頻繁に用いられる世界特定要素がある。

３）W1 の信憑性を上げるべく用いられると考えられる established, civilised などの肯定的な意味の修飾語がある一方で、W1 の信憑性を下げるような misleading, erroneous などの修飾語がある。

４）同一の単語が文頭用法と叙述用法の両方で世界特定要素の名詞として用い

られることが有るが、その語句を修飾するを表現を比べると明確な違いがある。つまり、文頭用法では信憑性を下げる表現が、叙述用法では信憑性を上げる表現が多く含まれる。以下の例における、叙述用法と文頭用法に用いられたbelief(s)の修飾語句は対照的である。

i) His arrogance shocked many Americans, and his unwillingness to recognise important constitutional protections of individual privacy and his commitment to majoritarian domination over the individual were both contrary to deeply held American beliefs.（叙述用法にbeliefが用いられたコーパス中唯一の例であるが、その信憑性を高めると思われる表現deeply held Americanによって修飾されている。）

ii) Contrary to uninformed belief, the lute has never been a folk instrument.
(前述したように、uninformedは信憑性を下げる単語)

1）～4）から、W1として機能する世界特定要素から成る“信憑性”のスケールを想定することができそうである。そのスケールの両極端の一方はlawに代表される信憑性の最も高い極であり、もう一方はhighly misleading impressionなどに代表される信憑性の最も低い極である。そのスケールはコーパス内で見つかった特徴的な世界特定要素を例に示すと以下のようである。（ここに示す序列において、個別の表現のスケール上の位置は恣意的な判断を含むが、スケールの両極に近いものと中間的なものといったような、それぞれの表現の大体の位置は決定できると思われる。）

信憑性　（低）
highly misleading impression
erroneous report
disinformation propaganda
stereotype image
uninformed belief
outward appearance
popular belief
expectations

previous experience
practice
established practice
civilised behaviour
law
　　信憑性　（高）

文頭用法は、主に信憑性の低い世界特定要素をW1とし、叙述用法は、信憑性の高い世界特定要素をW1とする傾向がある。そして、信憑性の高さが中間的な世界特定要素はどちらの用法にも用いられる。命題相対化の意味機能は、世界特定要素W1の信憑性が高い程、「基準－違反」の意味をもつと判定し易くなり、世界特定要素W1の信憑性が低いほど、「誤り－訂正」の意味をもつと判定し易くなる。

7　終りに

Contrary to NPを含む文には、２つの世界を命題ｐの真理値に関して比較する作業、つまり、命題相対化が関与していると考えてきた。２つの世界で命題pは異なる真理値を得るのである。典型的には、その２世界の対比はNPの特定する世界（W1）を比較の基準として、その基準に発話者の経験世界（W2）を対比する作業である。W1がW2を解釈・評価する比較の基準となり得る理由は、そもそもW1にはW2における命題の真理値を予測する働きがあるからである。この働きを世界特定要素の信憑性と呼んだ。信憑性の高いW1で命題ｐが真であれば、経験世界でもその命題が真である可能性が高いことが予測され、信憑性の低いW1で命題ｐが真であれば、経験世界ではその命題が偽であることが予測される。そして、contrary to NP（W1）のNPとして信憑性の高い世界特定要素が選ばれた場合には、経験世界（W2）でもｐが真であろうという予測がはずれることを表現することになり、NPに信憑性の低い世界特定要素が選ばれた場合には、経験世界ではｐが偽であろうという予測があたることを表現することになるのである。信憑性が中程度の世界特定要素の場

合は、それらの中間的な特徴をもつ表現と位置付けることができよう。

W1には比較の基準として経験世界における命題の真理値を予測する働きがあるということは、W1として機能する各種の世界が経験世界と次に示すような関係をもつことを思えば驚くべきことではない。言語情報世界とは、経験世界を話し手・書き手が文書などとして言語化して表現するものである。基準世界とは、それに経験世界が追従すべき規則からなる世界である。知覚世界とは、感覚器官を介して認識した経験世界の表現である。知識・思考世界とは、経験世界の出来事を一般化した命題とそのように一般化した命題同士の論理関係からなる世界である。心理世界は、経験世界でそうであろうと信じる命題、経験世界でそうあってほしいと欲する命題を主張する世界である。本稿でいう発話行為というグループに属する世界特定要素は、経験世界において実際に発話された言語表現の社会的意味機能を表すための名前である。

信憑性の低い世界で真である命題が、経験世界の現実では否定されるのが「誤り－訂正」の典型例であり、文頭用法に多く見られる。一方、経験世界で真である命題が信憑性の高い世界では否定されるのが「基準－違反」の典型例であり、叙述用法に多く見られる。この２種類の意味の違いは、話者が経験世界と不整合の関係にある世界をどう処理するかという観点から説明することもできる。経験世界は、他の世界の信憑性に対する証拠のような役割を持っている。「誤り－訂正」においては、経験世界に反する世界が信憑性の低い世界として評価される。その評価により、証拠たる事実との齟齬は解消される。しかし、「基準－違反」においては、経験世界の事実と反する世界の信憑性が高く評価されるため、不整合が解消されないのである。

最後に、文頭用法と叙述用法の違いは、contrary to NPが文の主題（theme）としての機能を果たしているか、題述（rheme）としての機能を果たしているかという区別とも一致するものである。Halliday(1985)の定義に従って、主題とは「話し手が何について話すか」を示す部分、題述は「主題について何かを述べる部分」とすると、文頭用法のcontrary to NPは主題であるから、話し手が信憑性の低い世界と不整合な事実について話すということを示しているといえる。題述の部分で、その事実が述べられる。一方、叙述用法のcontrary to NPは題述であるから、主題で述べられた事実について、それが信憑性の高い

世界と不整合であることを述べる部分ということになる。

8　付録

以下は、コーパスより抽出した世界特定要素の主要部名詞を、第１節で示した基準により分類したものである。（一部、意味が理解し易いように主要部名詞以外の修飾語も示してある。）

経験世界

E C joint action, settled reasonably orderly behaviour, not contrary to weight of evidence (証拠となる事実), normal daily recent experience (出来事), received history, reaction, vote, the state of emergency imposed, what has happened with the savings and loans (in American banks)

言語情報世界

Dr Weeks (情報源としての人名), the Commission (団体), the Word of the Lord, biblical account, adage, article (記事), bulletins, commentary, definition, depiction,

description, eulogy, evidence (証言), familiarity breeding contempt (諺), flyer, folklore, information, President George Bush's initiative (主唱), labelling, labels, language, legend, letter, advance publicity, myth, mythology, pan, picture, prejudice, propaganda, political punditry, record, rhetoric, rumour, saying, story, title, version, what critics say, words, what I wrote,

基準世界

Islam (宗教) ,the third Geneva Convention, art 119 (規則体系), article (契約の項目) all that democracy stands for, character, cease-fire, clause (契約書の条項), code, conditions, common sense, constitution, convention, the course of history, custom, Declaration of Rights, democracy, dogma, doctrine, ethos, figures, freedom, the common good, gospel, grammar, guide, guidance, guidelines, instinct, instructions, integrity, interests, jurisdiction, justice, law, line, manifesto,

model, morality, nature, norm, normal behaviour, objects of the 1974 Act, optimism, order, peace, philosophy, platform, policy, position, practice, precept, program, regulation, religion, reputation, restriction, rights, role, rule, scheme, scriptures, section 1, spirit, stance, standards, teachings, tenets, terms, theory, tradition, training, treaty, trend, usage, welfare, wisdom, wording

知覚世界

appearance, impression, observation, outlook, perception, sense, tone, his Spiting Image persona, what I heard, what I read, what I was taught, what I am seeing,

知識・思考世界

analysis, assessment, conclusion, concept, decision, experience(見聞、知識), idea, image, implication, interpretation, judgement, logic, meaning, misapprehension, notion, opinion, point, rectification, resolution, speculation, thinking, thought, truth, understanding, view, imagination,

心理世界

aim, assumption, belief, commitment, desire, diffidence, expectation, fear, feelings (意見・信念), hope, insistence, intent, intention, objectives, obligation, preference, purpose, scepticism, supposition, suspicions, what should be done, will, wish

発話行為

advice, agreement, allegation, announcement, answer, argument, assertion, assure, claim, comment, compromise, contention, criticism, denial, depiction, forecast, guarantee, prediction, proclamation, promise, pronouncement, proposal, protestation, recommendation, report, statement, stipulation, telling, undertaking, warnings

注

1　命題内容の表わし方には色々あるが、本稿では単純に元の文に含まれる単語をハイフンで結び表すことにする。このような命題表記においては、時制や数の一致などの統語的な特徴を省いて示すことが多い。

2　命題内容が発話者（書き手）自身の情報なのか、他の情報源に帰するものなのかの区別は、その命題の真偽を特定する文脈（世界特定要素）の重要な特質である。例えば、同一の命題が Tom reports that a thatcher's work doesn't only occupy the summer. という様に、Tom の伝達したものと明示されていれば、その命題は発話者の知識においてではなく、Tom's report という要素で特定される文脈において真なのである。発話者自身の情報（averral）とそうではない情報（attribution）の区別については、Sinclair (1986), Tadros (1993), Hunston (2000) 参照。

参考文献

Allwood,J.,Anderson L.G. and Osten, D.(1977) Logic in Linguistics. Cambridge : Cambridge University Press.

Baker, M., Francis, G. and Tognini-Bonelli,E.(eds) (1993) *Text and Technology: in honour of John Sinclair.* Amsterdam: Benjamins

Coulthard, M. (1986) *Talking about Text: Studies Presented to David Brazil on his retirement.* Discourse Analysis Monographs No.13. University of Birmingham: English Language Research

Francis, Gill (1993) "A corpus-driven approach to grammar". In Baker et al (eds), 137-156

Halliday, M.A.K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar.* London: Edward Arnold.

Halliday, M.A.K. and Hassan, R. (1987) *Cohesion in English.* London: Longman.

Hoey, M(ed.) (1993) *Data, Description, Discourse: Papers on the English Language in Honour of John McH. Sinclair.* London: Harper Collins

Horn, L.R. (1989) *A Natural History of Negation.* Chicago: The University of Chicago Press.

Hunston, S (2000) "Evaluation and the Planes of Discourse: status and Value in Persuasive Texts". In Hunston, S and Thompson, G (eds), 176-207

Hunston, S. and Francis, G. (1999) *Pattern Grammar A corpus-driven approach to the lexical grammar of English.* Amsterdam: John Benjamins

Hunston, S. and Thompson, G (eds) (2000) *Evaluation in Text.* Oxford: Oxford University Press

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G.N., and Svartvik, J. (1972) *A Grammar of Contemporary English.*

Ohashi, S. (1998) "Propositional Relativization in Written Texts." *Kanagawa University Studies in Language 20.* Kanagawa University Institute of Language Studies.

Schmid, Hans-Jorg (2000) *English Abstract Nouns as Conceptual Shells.* Topics in English linguistics 34. New York: Muton de Gruyter

Sinclair, J. M. (1986) "Fictional worlds". In Coulthard (1986), 43-60.

Tadros, A. (1993) "The pragmatics of text averral and attribution in academic texts". In Hoey (1993), 98-114.

Winter, E.Q. (1974) "Replacement as a function of repetition: a study of some of its principal features in the clause relations of contemporary English." Unpublished Ph.D. dissertation. University of London.

(1977) "A clause relational approach to English texts: a study of some predictive lexical items in written discourse." Instructional Science 6.1.

(1982) *Towards a Contextual grammar of English: the Clause and its Place in the Definition of Sentence.* London: George Allen & Unwin.

太田朗 (1980) 『否定の意味』大修館書店

大橋哲 (1999) 「文章内の対立命題」『国際経営学論集』(神奈川大学経営学部16・17pp309-344

(2002)「認知世界における命題相対化　内的世界と外的世界の相互作用」『神奈川大学国際経営研究所国際経営フォーラム』13, pp65-92

坂原茂 (1985) 『日常言語の推論』東京大学出版会

波多野誼余夫 (1982) 佐伯伴 (編)『推論と理解』東京大学出版会

毛利可信 (1980)『英語の語用論』大修館書店